



加2
門號
卷之二



れやなが

後かき

ちの月アレナ一
けありやハ五アレノ五アレノの

月アレナ一
声アレノ有アレノ月アレノ

れやなが

後かき

あケバ又アレナ山アレナ有アレノ月アレノ

あり月アレナ月アレノ月アレノ月アレノ

れやなが

後かき

あケバ又アレナ山アレナ有アレノ月アレノ

れやなが

後かき

川アレナあアレノの池アレノ有アレノ月アレノ

有アレノ月アレノ月アレノ月アレノ

卷之二

古今の事は、さうざれやうがた、口語の如きを、

ナレバ
れがあることを知りけり。これを心にいじめてし
まじえりや。ノミシテハアモモジマ。

卷之六

後拾遺

もあくもろんああやうでござる。年ハヘヤ。

三
五

是へよもうござひの匂のりもれやく是へ
ああるぞ 『あらそトシキコト有

行狀

卷之三

ひふまむぬくハソウちややモクシテテラル月もあらよ

ナニナムゾ

イカナルゾのえくじ

目次

リやハノミの れやへば ミツのれや ハモニトウハリ
イタマニ やハスヒアムシタガヒのれや ハモニ
チモビヨウリ シモビヨウリモアリ れやハモニトウハリ
チモセテ リモビヨウリモアリ リモモモビヨウリ

歌島のや
とハ詞を

あげきといひをみハキミ らいりあむとくのくよ
やれどまああいぞ れきも おううきも
あくねまつるゝまくしてまぐてふかく感せらす
時あぐ鳥をつくと さてけや ハモ あげき乃
声すらゆふ今からふ遊ゆのや とひて こを
もううりとく

歌
白
集

ふ
千

ハシのさくは被りてひふとほふの匂のうなづや
新島のやくそくもひるごく やくそくあるのト

卷之三

又間あらわすと
うち浦士ともうまやこくはの島の玉藻城がきえうべく
先ハ御ゆきのもともあがまのやう浦へ

欽定四庫全書

5

「そぞぞもあくはふうとうかの夏の日それどんや
」
「あよびのさうぞによおせても生れがむけり
」
「トフカソウアラモ

欽定

卷之三

うち波の下を。考あけ。にあらまぎのいとすあく。せん
手も手やあどひ。ばくさびのや。のうまゆり。あれども

古今　あがくまとあればかうへ

古今　あれをみとてあざきゆいでやくもあほぬまふへ
きこひでやトもがくまむ望け一ト身もハ上ハ下
らばりふとえくすせで金持りしてへ

歌鳥

松ま　しさやあごもてふともさづくやそもくいを被られね
けりくやもがくまのゆゑ一やノヤシのやされ、
あくらべトもまう又下め同音や同音や

歌鳥

古今　やよよまで山ほとまはにまつんおせのやふをい豆びぬよ
是もあげや／＼とやよよ／＼里語ハユレハス

翁けや　ひあや　あづのましもあがくまのやへ

歌鳥

古今　男があくみをす。事樂ふをまくれゆ。あさく田子のくわーの才や
身やあくハ語のあそぶが時ハまぐひのやまくは
あまくは初めからまくじ格をあれもくじまくかたりて

歌鳥

翁　志が生む宵のああをかくへままであかりん一や
けなや。ラエノミアよどー

歌鳥

後撰　ちう川乃瀬の糸入おぼ一かれどかくふ人をよせ一あをや
このをソロふや。ソロモテ歌鳥きつてゆ

歌鳥

古今　あくよびぬきのをさのかりあくとまのをあやひとあをからふ
もうあの森やナとテバ歌鳥トクねをまー是ハ
かりよすひとおだよりふとまの森やナトかうへ

歌古ノハ
歌集

形古ノハ

あもれある。お身のとてや。減えどりつひかせの處とありへど
是ハ津えどりつひかせの處と思へばあもれある
お身のとてやナとよべりて。是とく又け

一本ナハ

おさくハ
〔おさく〕あもれあり。お身のとてや。減えどりつひかせの處とおりへど
是ハあもれありト。お身のとてよべたる印

おのあもれあり。お身のとてよべたる印
リ。文はあらう。お身のとてや。減えどりつひかせの
處あらん。思へどももれありト。是とあるを
あくと。おもじ印をこへふくせても様
されば。文はあら。はたけいのやへ入る文字
すりき。あげきのや。切る。

五十一

スコ。お身の印をあくらむ。ハ下から。モ紙元会く
んねー。そ。一本ハ。る文字。一本ハ。り。文はあ。ハ
はれを。もあしも。も。さ。か。ざ。し。されど。歌集の
や。ノ。さ。か。づ。一。か。ぞ。したが。の。や。ノ。か。づ。つ。
よ。う。歌。あ。の。や。ノ。う。き。不。い。れ。されど。も。づ。れ。も。例。り
き。が。も。と。ば。後。人。て。改

歌古ノハ
歌集

おもむき。ハ。く。と。ぬ。や。

時。皓。樹。小。お。ほ。よ。う。こ。音。ハ。お。だ。か。り。こ。ま。る。曲。と。み。
神。樂。の。早。音。す。も。歌。ご。と。お。も。じ。か。や。と。お。が。ち。
う。た。り。哥。乃。ち。じ。う。つ。と。ハ。あ。も。お。あ。が。ち。て。う。た。ひ。
い。く。く。へ。き。ふ。身。の。し。い。ゆ。な。こ。と。を。ゆ。く。り。あ。た。と。が。
を。よ。む。ベ。く。ぞ。ト。有。下。畠。

秋月
行はるがやかりせうひふら。アーチもあまの船かことつてやうし
秋吉今
神風やみ十次川源をさづけに代ふまくうりえ
後れき
ゑが代つきトこそ思ふ神風やみもまそ川のまよえかぎりへ
古今
舟さうや駆波のまふやくまのからくもあれハ老ふげくうあ
秋吉今
とせりあややまとまくねも神代よりゑがくもとやかくわおれいし
けふがもりやハ却そくやもあくびくしひのやみも
あくびのやみてせうやトあくらきてくらきくら
くらうげくもよと里ふべすればよくこくひめ
や又ねえぞ又うあつてもいもくえ

古今　ゑんあぐさもうひづるゝあや　姨として山みて風をさんて
古今　大ふやをしほの山もけふをハ朴代のこゝも口ひソヅ
古今　いさこくにゑよハヘミモゲズキや　かゝれ里のあれまゝもを
万葉　いそこのやまつの山乃るおもよりゑあす社を嫁スルシテ
古今　あまのやケニカサ山を半てこれバカウテモゼヤ　モガふニセハ
万葉　かくつけやさの・ふかぢりをか一ゆや一まれバ妹ふあハぬも
古今　みよ子やくらぢさく山さくくふむづけ人乃ゑノゼヤアゼ
古今　紀のあやゆよみあみあみ捨すふあさくふざくふりひ見て一ゲ
藤倉右太氏集

秋古今　しきりややゆすも秋のそぞろに風のまきふくらし
秋古今　あふ波や木の花をやくらふあ／＼と手む黒のねむ
あ／＼と氣むるそ
秋古今　さくは波や志望乃かハあれゆ＼波むく／＼さくは山さくらえ
秋古今　よほのくみや月の光りが／＼う／＼バ波の花も秋ハ來うけり
後於是
秋古今　黒ちぢめちげき本のうら波も月のねむうけで又ト繁
後於是
秋古今　あきぢぢあれ神あねみー秋のまわりぬ風波吹あ／＼と
秋古今　うづにやまおもすゞひぬ芦の葉あづのじ石づみ風をく
秋古今　秋志のやかみのまやあづく／＼いこよぐだけふすようけ
秋古今　そもそもやすく夜の秋乃思ふけて月をかく／＼字のねむ

△ 佐於吉
みちもなあ。むごとのがまくされてうるやう奇きをきなあれ。
ちもあがもりや。ハ例をおもくアモレハアモカタ
がくまや。けあがもりやの申てもふ。歴々ハ
地。若ちもとつもよすや。けあがもりやの
引奇おゆ。モハ。万葉古今をよくうけて
アラブき。あがもりや。ハ新東洋ハレトあほー
○脚絆あひげや文字よみや。をあれ。ハ。あは
御。をまくとまくとまく。あはの「む」の
あどよちバ。こうこうハあれ。とかでてもまくしやん
ゆちじうあらき。ゆちをかくつらげてあがりまく
まうト有フ器。されよ。神宇のとも。ハ例をアス

新邦
くぬぐをすうせんちだふやくもとほのえもがれつ
於き
「時事」
かのをくふするをひとあてもあるやうにゆりやゆりものへけてぞ。四

タルヤ

拾
卷

かのをうふるあるとのとあら城あく
祐りや祐りものにけてぞ思

又

卷之三

五十三

卷之三

「ういのやみきあつてもさうもく。うろこ
まくらやトウカバ
〔是物もまひハ夏格之
ヤサカヤ

立秋とひくやう

卷之三

うをばらをまわし

ヨノ主ふ
ミホヘハ兔や獐やとウシイ日も正うくらをバモモタリシ
けむのやハよくきのやトムナベ

のそやたりもぞ

卷之三

傳少納言花冊子

四

二

あめりき あがしや。スルフローダヤ。又
やうやく、や 又 ようだとうや。ハナフモリラゴ
ゆうやもあべくがや。もあくわバ
ス。や ひこトキもあつてもさうめや。

○右はこく やハリひがよくもくあれバ引奇
ベヌクハ やふ似る辞あればけ改みひく

初めぬままでかハヤカハルニシモナキテヤトムシリヒテ
ヨリ死ヌモナホ一ゆゑふまがキナハヤトツガキアモトカトハラ
シキナホ一されどナカニカキビカヘリナキアトカキヌ
カヒシタハトナホニシクマノモナホニシクマハツ

ムシノト有

力之部

5

やめむるい聞あひてもさび聞たまふ

かく。あひりすとる月日もすみる。今年もすまをぬとうきく。
と去
お神
ひづふい。年波のえぬ。たのもうよき。ま。のやう山
あ或
妹うりと。住保の川べを。よけゆ。ば。小夜う文ぬ。あすかくすり
古今
たくの。着の。染たび。だ。あきの。けぬ。う。そん。きの。すがまふ
む。百葉
う。ま。う。行。ゆ。ゆ。の。恩。乃。新。歎。ハ。き。あ。る。あ。み。ち。う。と。と。す。き。
む。お東
かちづき。秋。歌。う。じ。小。秋。歌。と。て。人。う。歌。う。山。か。き。の。歌。
いざ。や。ノ。り。う。じ。詞。う。あ。う。ト。され。ど。も。う。

後^{おき}
みゆたとうよあはもせで今ハとおまの様ちとをうけ
うけハをまじ切る一

古今

かくすれどくちれどくひきだすらとあはれ前^{まへ}秋^{あき}
秋の月のやうやうせんはあつむの物の事をアシテと

かくす

古^い

すゑのふくはすざくさくとれらをひくまへとまへば

かくす

古^い

秋

かくす

古今
文

かくはとよまんてうり川あまきりあはうてうるがふ
けがみヲハモみてよめり。羽衣はけうみを
後をあへ清てよもどもが済うべき舞へ方葉ふ
ダサキガモコロカホート有スミノ吉川
の教ふがみか。リキのまきか。

かく中音のうか。ままたむ。場かむ。むとさ
間空がむ。ちどりむ。と用ぐて。差して。手斜
たまけたまうまえ。スガハ。ざふと。ソラムモ
ツボヲ。でうて。みと。ソラム。がふと。ゆくと。お
まく有。福。ふ。反。ふ。

美第十

物の形あれハ七音。七母。五音。九音。八音。六音。

古今
文

おりろれせをばかやまをかまふかひまたり。おひばあす。がふ
右。万葉の。び。がふ。ヲ。そ。く。は。一

古今
橋元ちうじくすれ。老らくおこえとつある。ちがふ。がふ。
老らく。あひる。ト。ソ。と。く。ら。く。ノ。反。し。る。
老らくのこと。ある。まげふ。うち。あ。様。ひ。ち。り
え。ひ。く。の。れ。ト。身。と。ス。ヨ。う。り。川。の。ふ。の。え。も
ヨ。う。り。川。あ。ま。す。り。あ。ば。う。り。く。ち。し。ふ。あ。く。渡
る。と。あ。く。ア。レ。ト。身。と。ス。ヨ。う。り。川。の。ふ。の。え。も
よ。も。も。け。ふ。ノ。里。宿。ヲ。タメ。ふ。ト。く。故。て。つ。あ。候。
わ。か。す。も。た。が。ふ。と。あ。る。き。ド。

古今
文

あ。あ。あ。と。う。さ。け。れ。ば。春。日。あ。る。三。月。五。の。山。お。ひ。一。月。う。き。

古今
文

五

古今
文

五

切ウセ

放き大ハシのサリ人乃人知モ其の夜をアフミトム
ニシモアフコト 夏の夜をアフマリ人ナリスハ

シのアリ人ノンウモトカク

切ウセ

シロセノセハモゲルミシテリ 里治ハサテモ
秋の夜アヒウセモアキテ派ラキリ 我思ふ人のことつてやセト

け音のとハ秋のあふあむるる我思ふ人のこと
ツテヤセト ロリテモ トヨタコトヘ又

古今

古今モウモウセツツハシナチ元乃小浜の傳教山 フミ乃元
ナキハ添ラウスハシナチ元乃小浜の傳教山 フミ乃元
ナキハ添ラウスハシナチ元乃小浜の傳教山 フミ乃元
ナキハ添ラウスハシナチ元乃小浜の傳教山 フミ乃元

古今

これもまへ小風ド

切ウセ

秋の夜アヒウセモアキテ派ラキリ 我思ふ人のことつてやセト

切ウセ

古今

思へ加くう。モアハアヒベモトモニ傳教山の事ナシミ
ナキナキアモドクシムカノアマビ視ハ

そのやね、もまじ視ヒ風ド、てうハシテシムアマビ
視のあうもなりヌもまじ視ヒ風トナハセぬも有
てゆともそのとどくハ

お残す

古今

思のいあうにカモム人各のえの橋や山の事の事ナシミ
視ヒ風ハシテシムアマビヒカシトニト有
思のいあうにカモム人各のえの橋や山の事の事ナシミ

思ハシテシムアマビヒカシトニト有
くべきもうちスカシムジカシムハアベト上
ミニスアケハシテシムアマビヒカシトニト有
ミニスアケハシテシムアマビヒカシトニト有

切くハ

切元

くれあわふ波のまもすりかくらへ人のあらのじう
かくらへ人のるのじうへ人のるのまもすりにトシ
そのじう

切くハ

古々

今きうきくハあやましむ死あどはふソレ意モトビテ
老ハ人やうも見れハ人やうも見れハあくモト
ミツシヘス又意モトアシムハモトシムシ御めことハ向ノ川音の
西ふりをそそ金モトモトベー

切くハ

切元

ゑりよしのまげきかくらへればたの森の手替ハモト
モハあ足よこのあげきかくらへばほの手
さりの木枝ハモトハモトモハモトハモトモト
シテシテモ

久き

古今

老ぬとてもどうあれせらまき。老もばくあらそやーね
老もばくあみあらやーもくらへ老くればこそくふ
もくとりよそこ先ハだノモトカ

久き

後終

うれすばくもぶくもそむくえぬものりとへれむべき方
是も知ノモトカゆりも何くハたのもへき方
あきお金ハ、めされぬせきれバトヨミ
あらかじんのじうかりやのりくゆく
かりくゆくゆくゆくアヒナリトアヒナリト
ものうハウキハメドキトヨミケフロハトヨミ
セテアヒナリトヨミケフロハトヨミケフロ
トヨミケフロハトヨミケフロハトヨミケフロ
トヨミケフロハトヨミケフロハトヨミケフロ

久き

後終

あらかじんのじうかりやのりくゆく
かりくゆくゆくゆくアヒナリトアヒナリト
ものうハウキハメドキトヨミケフロハトヨミ
セテアヒナリトヨミケフロハトヨミケフロ
トヨミケフロハトヨミケフロハトヨミケフロ
トヨミケフロハトヨミケフロハトヨミケフロ

古今
いづかくいはゆる中かまくらばくはをひそむのゆへこまくら

古今
けぬもかのまノクハ
ミのまよふにあ

うふ
おおむかしのそとくあらひどり思
見るもすゝまに
ウノミのウハニ

うつま
こそのまゝにあつて、郭公それもあぬか、壺のまゝに
是ホハニジキテ、ウムトのウハメヌトムミタリ

古今
うきよ。そや。あやゆひけ。ゆかりもくを差さう。うねてうきよ。
口

是ハ上三ツハキミドリカナ。トのうハアラモウキ
サトエテアマゲテ上アマリテアマモリ
ナガヌガアマガニキミテアマヌカムキウムチケ
シモトアマモリ

○初
五
終

ゆかぬふ ほのとらわあむて ゆきかの上ハ
てく格の辞より文る定ニト有

よく格の辞とハシメバ
ある。あきヌリタモ。アキ
アキ。

伊豆の松の舞八
あかへり鑒定
又伊豆の舞
あく

まへバ
かく
か
ハ

。ある。う。あき。加。又。せ。ゆる。か。見。ゆら。か。

くくでく格の辞をえて か。ト。ツ。バ。加。う。か。

加。タ。や。と。ハ。う。り。か。く。く。う。ま。の。ト。し。ね。べ。

加。る。や。ハ。加。る。格の辞をえて

。あ。る。や。あ。る。や。又。せ。ゆ。や。ア。ル。や。ト。ツ。バ。

加。る。や。

毛。バ。語。の。あ。う。を。ま。あ。う。と。ア。ハ。あ。い。

白。の。そ。う。ふ。あ。う。す。ア。ト。ト。ア。

加。タ。加。ハ。右。ふ。あ。ま。く。て。く。ひ。べ。

め。う。を。

古今の序
ま。御。乃。り。や。と。く。お。れ。ま。の。ち。り。も。せ。ど。と。ま。ま。き。の
か。づ。あ。が。く。け。く。う。ど。り。の。あ。い。ひ。さ。く。と。ま。れ。う。ハ

句のすす城もあり。しのんをえ。く。し。く。ハ。ふ。は
そ。の。月。を。え。る。が。ご。と。や。い。み。」を。ひ。あ。た。て。人。く。ひ
こ。し。か。く。り。う。そ。

万葉

たち。も。あ。の。り。吹。風。乃。く。ぐ。す。に。蘿。波。の。山。を。こ。し。も。あ。り。う。

ら。う。ヒ。ト。ソ。ら。財。ハ。ま。ぐ。て。く。へ。と。の。う。ら。ニ。ニ

か。葉

こ。う。ク。ぎ。付。う。や。され。ば。か。ま。く。れ。あ。ま。び。か。ハ。ら。け。み。板。の。え

け。う。や。ハ。あ。げ。く。そ。ノ。や。ハ

う。や

あ。あ。こ。う。や。く。た。の。そ。く。ハ。刃。ほ。て。あ。や。」花。の。名。こ。と。あ。る。い。

け。う。や。ハ。よ。ト。ソ。ま。ま。う。や。く。も。す。ゆ

千歳
ふ。ちむろをんあーと、なれういふこぼうぞ。そのくどらをもせう。
〔後後〕
む。たちちくゆあうくやむきくのまれるほどハヤくしもせう。
〔古今〕
む。やくにゆあがつまんがく。夜たれくゆこうみよとほくすうを

古今
やひかわましにゆうみとほやうを
けまをハものをノミリカセヒハシト
カヤシテ金情あよよシリエモふくまセヒ
クニムラハヒカモ
ヨリバ よのを下て手で引く セモ
アドハヨヘニムガロミナリテモシナフホリ
キトボゼバズシタクルベ
○又 ヒノミヒモハ
万葉
かくらぬ作の内が苗のむさ苗ヨリハまくつ今ハ引セト
もへいあせ。ノミ

あくよハよへりぬがひと うすすきは、西ふり
キをぶせバズクシテルベ一
○又 しノミセキハ
りあひのゆふるのゆうめおとハまざつ今ハいにせ

六十二

んむ。古今かく余をももとからくへとうかくをゆだるふゑをゑのをあせん
○むもしれをすすめかゆる格ハ
物事今
そな代みあそばふまを西のとのあかくとまでハをすすめかゆる
仰生はか是ハ東シ高一かく多をとあくとあくより
クテあそばハあまを西のほかせんとつをすす
モ
そな代みりよまはあまを西のとあせんそののとあ
あぐとまでハをすすめかゆるまじれ多をあらえどト
ワニシカ。あのむをびとまぐれハ本すすめかゆづく
かずのとものとをかくめてのと文ト有
も。ひあくつもほゆあまをうハせゆすれにあゆことまく
古今
古今ハ写しとくとくして五体抄へこまく人ト

むきびとり がくんば まくと人トツカム

ぞあノスシ

ズニモアラウ

ウジ。

人りもすれぬあやあ花吹きをどうちあひて意ぞしむかく

はキハかゝの切とハリキキモロセねど
あみてハカドウカホリト高モレト高モレト
モモグロをつみげかくをあくんトリモトゲ
ナレアタゾアテマクシムトアモトトモアト
ムカミハキダスヒトヨリダムシムトガムト
おさずドミモレズモ「お」をあく人トイチ附ハ
モクシミクナレバ「け」の助辞ニ
キのミを里傳モワタ、あどうちて意モ
キカミトアラシトヤムヒミニ

里語ハ

ズニモアラウス。ヨモ助辞モアラハ

六十二

ケム。

子五至多答
美もあもいあ多モテ苗のをちうやと。ハカリニカケル

吉久

ミセ。

女も花村のせ風やうちあびきんひとつをたれやうモラ

おまぐ

○羽を洗てておきはせ金てせどもハ
つらひやかさある山をみけをくわもくのあひのまく

後林き

是へ室トアシテ あく人一ノ羽を洗てゆど

のうあればさうぬふねるまきぬあそくすやんくあれそのく
毛ハくさぬあそトソアトモスアト羽を洗てゆど
スム。や。や。あげきのよ。もまじかくくにこの
あげきのや。ソレ。ざままでかくも何アヌあげきの
ことをあもあもとや。つれ

おまぐ

ちうからまをうあがねた井口ひがれかせのものあくみナシ

後拾

是ハ志ミトアリトアシトノ初を傳テテニ

モキモトニシトのちアモセヨイゼアラムモテテ浦ナ

是ハ浦トアリトアシトノ初を傳テテニ

レ初を源てモルを傳を含モテ務スナダレヤモミハ

何ノリホモスコト文シハアシモツルニシトハ

シモモジアカモボウツノ初ニテモトハ

又さくら。おのべのトヨモヤハララガララヤくもまび
カハカタマビヘヤハヤマヤキボ。ヨリクミ
アマヤマホのアドムタヒツリヨモアド
ヤクニヒテムタク。

る。ふ月ぬかとおどしきればあきはくはくつちりん
けづちノ里語ハドチヘく

む。吉今
タケシ
東海のすやの中山をくふあやうんをゆりひくめり
けあく重語ハナミトユナミジヒトウシテ
トウシテ
さくらのえハヒツをひよて秋のあはれせむらふそむら
けい引一トソリ引種ふまの時ハモヒカハカモベ
みくもさのひまくも里語ハナミトミヒトウシテ
トウシテ
種ふまくも一トソリ引種ふまの時ハモヒカハカモベ

一六十五

後編ナミトゾニテ

みどリ
ナミトゾ
トソリ語を傳ヒテトソラム

ひもじこもぢるすあれども奇のきハナミトゾ
一トソリ語を傳ヒテトソラムナミトゾ
一トソリ語を傳ヒテトソラムナミトゾ
ひもじこもぢるすあれども奇のきハナミトゾ
一トソリ語を傳ヒテトソラムナミトゾ

前編ナミトゾニテ

も。後編
今うるのくまハキミキアテキムヒタキビイテモだり
トウシテ

けい引トソラムナミトゾ
トウシテ

も。後編

む形古今

みうらもうまたあがくいづし川のつるきとくらひからう
らくは、おとづれてえきとまき、きよとてとてとて
うつまびらうとハリめらんてとやかううりこね
ニミカヘのアヌ

○(ナニト丁) 乙海をすとあるハ

おまき

アセアモアムルをなすものとすと人ゆくら。

古今

久きのひうりのしけきものりみ□焉くあくをまのちるらん。

古今

春のひあせはうらぬ里ある(ナニトテ) まくさうるる花のるら。

古今

ちあハ立アれん乃かくみうハ□とのゑあぐふあがらるら。

こゆくハのゝかみハあく後、かうとそら。トヨリ

けたまひナニトテ、達をすとある

二十六

む古今

かうりやあらぬ只ひをあざむかく、なまごの川のまきてとあらし

けとあしも、まきあー、ぞわ、そわ、あくの

たお風(ナニトテ) けえ、もきあー、ちぞも、あぐトふき

ぞ、こをモ、朝(ナニトテ) くとくとく

古今

アレアホたさざんかくもあー、いたぬしようをくふそくけ

○もまびけを本すおほづる格ハ

族古今

あづくいと神しよの爰たくててれんと、月をアセク。

初玉猪木、古々、立トシヒキ、初音、立、らんかくも、立
いふ様(ナニトテ) あくえりとふを本すおてててれん
みきとせきと詳(ナニトテ) いた、おもまびをも、おも
ゆべくしてのとあく、立ト有(ナニトテ) けや、おゆづる格ハ、あく
の文字(モモジ) けをあくナセくるとある

六百十九合
けむ
けむ

アラルホのアリタケトウをハラ坂の園をあわへひそぎてえり
我よりはをアラアモカヒヨツシのアミガの歌トハラシナリ
けけんトヨリトモラケルハタク。アリケル。ミニ
くあノ及ミカヘタリ。ミマキ。キナノレハ。ムサ
ミモクシ。ケル。

夏格

後撰

意ノ記もアリヒシホアミのを人セキトアドモキアハ
上トリギフ。セキ。モモトカラ附。シトムキベテ
格ちもをアリトモキズハ夏格。夏格ハ格ふもつ
ヒモソノラシのウタキモサヌ。モアリ。ハ
アリノ下。けんト傳。サモタラシ。

夏格

後撰

モコトアラシホアミ。秋のヒムザヒシ。モサルハ
モモマシ。モアカド。ヒシ。ハリ。及。リ。モルハ

六十九

夏格

六十九

ハリ。シテ。レリケレ。ヒシ。モサシ。アヌ。

モモアカタシモタリ。アリ。モアカタシモタリ
シテ。モモアカタシモタリ。アリ。モアカタシモタリ
又。ヤアカト。シテ。モモアカタシモタリ。アリ。モアカタシモタリ

後撰

六十九

モモアカタシモタリ。アリ。モアカタシモタリ
モモアカタシモタリ。アリ。モアカタシモタリ

おさ

後撰

六十九

モモアカタシモタリ。アリ。モアカタシモタリ
モモアカタシモタリ。アリ。モアカタシモタリ

おさ

後撰

六十九

モモアカタシモタリ。アリ。モアカタシモタリ
モモアカタシモタリ。アリ。モアカタシモタリ

古今　ゑむ。　多日せのとふひのせすらてんよ今ゆくをりてあまつゝ　ゑ
古今　古　　おぢきを風の音うハたれうあるをよりてうもん

○ひしきやでむまぐるハ

わうびかり神もあれとみまく山
をハいわはう神もあれ
ハクアモト、アモトハ

古々
ひくひくとてむまひく
ひくひくとてむまひく

あれハ云々かとよしハ宿をかるト
うそもトひしけりてもまぐり

此もあれとさういふ事から、おもろきの夕がおもて
上あがり、そのやうに、まつはり、トつて、問へる、ト

ひまむ務之 上のかきを後ノ時ハ 引トつたるを向左

卷之三

三

いくよもあくと。お身をあびこもかくにゆきからまほなしむらく
まつもとくれど。行ふるふを。うらへ、一ツの御てしもひ。
かくくべ又あざむ。きハ刻くあざむ。じハ物も

あきらみあくを。ハキナリ。ミタニ。
あく味。アミヤク。そのあきらめ。ハキナリ。

うあいさびくらむ
けんしきあいせ
くわがひのきうくは

ありうがあをーすぐのとがまへてくねー

もそが様子はれどもまことにひきとてゆる
ノトあるハ上のボミトヲ初のぞみとせのうりと
えのあれバトのあるカ、事よりあて
ちノトふクスカトソヨシとてふおほー

おえきのきゆる時ある

おおとせばかあへたえ

まづ、ごい又詞をふて、もととく

たゞああさりお被り来る

いふのれをうかんハたゞる

有のどく何ノトスカトあくとすむを

け給、下ふおく、うきのうらーくぬはせく

詞をばく

新古今
りあをだれ志のそタ風あぢぎりあへ方のうち

六十九

詞をばくのちうつせふかくべきとあるを
そこおかまくきをふせんとあく不せみて
ひあけゆせてうねもせうくびト有下畠
布ああまくてうねべー ばく、意のくとハ

詞をばく新古今あくわれば人らべー

古今
そばのうじくちのまく山のうづか乃きゆる時ある

○うひしきとてもとづくハ

お古今
レテ今まで世おハアリムがませぬあをつまうらハ
え、つまつて今までよかあるト、まともるを
あらぬのうひしきとてもとづくスをハ上へて
つまつてませぬあを、ト不全情をあらぬ
まつておんをあらうるのえおたがあらざりお被りされつ

3

3

形

古今

る 俊格
えやこあはれをうそはといいづるふみくと見せふたり
まううちかくふもじややふは夏格てよふ——
み格ふくづれてフトもまづハ夏格之夏格ハ之の

のうきの聲を聞に屬くゆきへつとふらんと傳へ
すべ

る 俊格
お古今
歌をば歌ともかききもそめ。宿の川音ノアドモフニ

ふもす小夜年にて夏格をもつとへらへト
宿をすまえ

る 早しぬ
秋春
うち見ていく日ふへくる晝月乃よりの余れ五指のす
今ま
淡後修うち和ちのすゑふいく秋月美ね。月乃夏かう
是あら夏格くらむぬ下へうへト宿をすまえ
夏格ハキ音のすゑりて月をほくじねべー

夏格

お古今

いきなりすり用をへてある。ちびりーやはしきのうれ事
れも夏格事ぬ。とらんと宿をすまえ
上のありそ。のやかなの附。ましめ。ゆる。とまを格之
上のありそ。と。徒。まはせ。ましめ。ゆる。と。まを格之
それそ。そ。のやかなからみて。ぬ。と。まを。夏格之
夏格ハ格子も。れあぐくのうそ。のゆゑ。まく。わく。
又。と。徒。等。めがく。と。ぬ。と。むまづ。夏格之
夏格ハ格子も。れあぐくのうそ。のゆゑ。まく。わく。

六版

さくさく下す。すくむ。と。れいふのれだう。あくハたぐふ
おき
ありとてもいいくよ。と。かく。かのそ。す。や。べ。ふ。お。を。ば。ぎ。て。ん
万葉
あひきの山。すく。声をひだれあく。との。ま。く。と。す。あ。す。を。ひ。

四
三

後漢

て御のよきが如くはあくも又ゆるをめとぞき。け。
上のかうとも。往のきよ時ハ足ゆ。ゆ。あぐ。ゆ。
もまぐ。行く

古今
たがりわよがれとてうおなちどくみもゆゑも声も
まろ
たがりわよがれとてうおなちどくみもゆゑも声も

一七七

以
之

卷三

三

拾

古今

卷之三

もこのものもそのままであるべきのところべくと見えぬもうち

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper, possibly from an old book. The paper has a textured appearance with visible fibers and some minor discoloration or foxing. There are a few small, dark spots or stains, particularly one near the top center and another near the bottom center. The edges of the paper are slightly worn and uneven.

上うりぞのやぢをそむる時ハ、況キ、きいてもまふ
格をもととてけんとて、夜をノイニモもまじて、さ
かてよとてきらきらももまじ初とぞくして、わ
ざとあくまへあくべとて、うち時のまづき

乞へあらはつきまくバト
さきのゆゑてもまひあら
らむてきく
古今
古今
あかんきてぬむけー
あむをよそし
ちとみやべをふわまえ
元よりも人をあふたりあけれ
しづれをまたみぢんどうぞー
上あかりもと後多み時ハ
元きトるまきそ
もまくぶ格

		よせかり。そのや行。坐の時ハ。立モノ。レ。
		上せかり。モ。ヒ。徒。坐の時ハ。立モノ。キ。ス。
	立モノ	おき。てき。足しき。うかりき。あうき。
	立モノ	えき。歩き。足そき。歩えき。歩りき。
	立モノ	ゆ一。て一。歩ひ一。うかり一。あうり一。
	立モノ	足一。歩一。足へ一。歩え一。歩り一。あうひ一。
上	の	かう。やま。よき。ト。立モノ。ト。歩り。もも。

かほ

神代よりいくらへみしをとらみが神多山乃もがまはぢつ

みをとらみが神多山を神多山トハシハヒガ
ミモニをとらみが神トハシテハ序之あら山へ大和

てのま

古今

神多山の事れ屋おたれゆふみぶれあハ思ひもあて

のま

かほ

伝くは山の皆まん人あらむいくよへいととくまくとあ

ちハツク

かほ

傳くは山の皆まん人あらむいくよへいととくまくとあ

ちハツク

かほ

○後撰ナ一 美術院やも宿うる人のあらま。セバ
○万葉ニ あす川志がみどーぜりキ。セバ
○後撰ナ九 オレバよとワれー附ゆいぞ。ま。セバ

くらませハ、れりふとくませハ、けハ、あこ
た。まきバハ、ヘバトソシニ
是を二き反しあれバ

をまゝ反しむ

され時又望まさせバハ
され時又

久。ま。反。レ。久。又。

又らまさせバハ

うま／及レ うえ らせ／及レ れ

卷之三

富士人のあらすじハハ
富士人のうへバハツシム
ハレバ、れラ、ラクヨウセテ、ラバ、アスカ財ハツえ
ヤモリ

卷之三

左

ちのせも見みつけ
叶ひまへ

もあつてキアリ金きのあらわもあさんるまへバ
けまへとハドシカモツれど又こむも
ヨリハ ん。トノマサレタケモサゆ
むく。五。まえ えをトカゲテ まへト

山東之風氣
之氣也。其
風氣之氣也。
其風氣之氣也。
其風氣之氣也。
其風氣之氣也。
其風氣之氣也。
其風氣之氣也。
其風氣之氣也。
其風氣之氣也。

ま
あれとものそれもいふことあるまつたんじふことあるまつた
うめり。あたりと負ふことあるまつた
ひよこども

うめりふたりのやうに
ひきこもる

出

後撰

いふやノ里吾ハドノヤウニシテモシレハムハアのむきび
クモクル同サアリキトソセリ

す。バトソ向ハアレハ別

アマスバ。アバヲノゾラ

× れま一バ。ラバヲノゾラ

△ イマスバ。モラノゾラ

× らま一シバ。ラバヲノゾラ

「ミミエアマシバ。ミミエアバトワタヒ

ハシレキ一バ。コノバトワタヒ

カミマシバ。ラマモリノゾラ

一七十五

アマラキ一バ。アラバトワタヒ

× らま一シバ。ニキミタモルバ

ラモノミシバ。ラバモリ

アレバ。ラバ

アマスバ。アバノゾラ

× れま一シバ。ラバノゾラ

アレバ。ラバ

アマスバ。アバノゾラ

アレバ。アバノゾラ

アマスバ。アバノゾラ

けす。一ノバニ。下をひく。上へうる。
キリバハ

後本き

月夜のつらぬをしむる。たひぬはぬのふたりまへく。
けキリバト。あらゆるハ。その。市の。ふたりて。チ。バ
ツア。河を流て。やべ。こね。みと。ハ。ぬあハ。山乃
あらゆ。一ノバ。うち。か。ト。流て。ゆき。又。山の。あ
あふ。キリバ。う。バ。り。れ。ば。フ。ル。キリト。首。又。あ。キリ
ス。バ。ト。あ。り。き。三。附。ハ。お。ほ。く。上。く。う。り。て。コ。リ。ト。復。乳

ミヌ

お。お。す。わ。る。チ。リ。バ。ド。る。ふ。人。あ。れ。が。お。ち。も。め。あ。び。る。く。あ
お。お。ハ。ド。リ。キ。リ。バ。ド。る。わ。く。ま。ー。と。お。か。人。を。お。に。ゲ。お。お
く。も。め。あ。る。よ。ト。い。よ。き。あ。る。を。そ。の。よ。か。ノ。ギ。ア。ー。ト
よ。き。を。口。文。字。く。あ。く。ナ。セ。る。格。

七十六

ま
紫式ア日記

。た。じ。あ。く。ト。コ。バ。う。た。く。く。し。る。ゆ。き。ひ。け。て。バ。レ。ふ。く。か。ー。か。ー。か。ー。か。ー。
ド。ノ。ヤ。ウ。ニ
け。て。バ。ト。ツ。フ。羽。
あ。ひ。え。て。バ。 口。ま。ま。ハ。 あ。ひ。え。て。ハ。
可。ひ。り。て。バ。 口。れ。れ。て。バ。 口。の。び。る。て。バ。

あ。の。て。バ。ノ。ハ。 ま。ま。で。ま。ま。と。も。め。う。だ。け。バ。ハ。 あ。る
く。そ。よ。じ。ぎ。き。 け。て。バ。ハ。 あ。れ。バ。ノ。ヒ。ま。り。く。る。視
て。あ。ノ。反。シ。 た。く。 た。れ。ノ。反。シ。 て。く。下。の。バ。ラ。腰。
て。バ。ト。で。か。ー。る。視。され。ハ。 ハ。 ハ。 う。だ。り。て。よ。む。ベー
て。と。あ。を。波。そ。の。そ。が。る。ハ

風。指。
そ。れ。の。う。れ。ぐ。じ。ご。と。あ。を。さ。む。ト。 お。ね。の。面。ま。キ。ー。ハ
初。か。底。あ。上。ふ。そ。の。や。が。ま。の。辞。を。れ。ば。も。る。と。こ。も

その處にト有 又アキアケテモトツモギレバ
ソシムサバキバトシテハモのモバキのモモ

壬二集

壬二集

壬ニ某
らへ。東海やとづあのねもうちてくへ。へきみのアキ
ヒヤハアシムヤ。こもまじふハカマヘ

是より下ハもまびみかもくぬ也のこをふく

古今
あひてたがつたりとまくとすとせりあらむ庵の草生
是ハ初をよそもトテラ

古吟
何を
ひくともかくもばら夢かひふるそ
ああぞも。ハ別に。ハふるのこやまと

古吟
何を
ひくともかくもばら夢かひふるそ
ああぞも。ハ別に。ハふるのこやまと

三

聖
經

あそびハ あそト まつ

乞ハトモトウリヒジクトモ又モトソロハ下の
むすび事ハカモレバ又ムキあるノあるハアモチモ

何
已

大正元年
九月八日

5

三

とてまかうとくせんれあじ人の

古今
けやうふ今そん年のきのとをぞうしらべるへま

是あハ今えん年のきのふをぞ。トつひてやうとト
まちくづくべき。ノキハ上ノぞ、むまび

何区
秋風か山乃すみまのうづくを人のこももひうゞ。ぞありふ。
むきびみかくまくは格をくゆめとせんぬべ
いづくトくまくひて。トえくるへ人のこももひうゞ。あん
きくあり。トくふきあるをそくへトくふもまび
望と。とくまきて。トえくるものけ格ハくふ
のすふ。何、下と。トえてむきび石及びしがすと
くねぐく

二

是ハあかばうたむあくえとおりしーハト
ウカニ
あくをそのあくシトヲしまじゆとぞくふくまセ
ナリけ格ハ上ふもソラ
ミタリソク上のもよび
望のあくもソレども

後編
かくまくのそとあらがひく

「づと。ども。うつ。も。うと。と。ふ。と。う。と。」
あゆる。と。と。と。と。と。と。
後撰
かくめとあらがりと
「しづとも。まちみひう。ハマう。あくまと。すう。せの。山を。せと。と。
○
うと。ハ財と。マモ。と。秋の夜ぞ。と。の。と。の。が。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。
化を。と。と。と。と。と。と。と。と。
むきひみかく。と。と。と。と。と。と。と。と。

19

化云行

げ化ヲ云行ハ初モ於古に格ハモナムシテ
トモふ歎ヘテそれあくム化のよリト行ヒトアキ
古今十四の行ハ思フアラモ歎ヘテその化の人を在れと
ウリモモアキモ化の人ゆゑもあまレんと思フアキ

卷之三

古今
詩

おののあふる事に山あらの

6

化
文
行

四

う集めのけやまに令たが
うちああよもがとれぬもあくふ

比化をふ行ハ
たれ たが
るる ト
うけの

八十

卷之四

於吉

ひれやさめりそでくまはよもじれどスカふもいせり
ゑよと、りうで、里語ハ **チニトヅ** **チニトヅシテ** へおびみるな
ゑよと、つうで、里語ハ **ドウレテ** へおハレ、ももび

詞之學而拾之

卷之二

七
九

トテアハナリク

印々行ハ
もよびふりもよ

切何

後撰

中へいきふや
りに風アゲハのそよぎ
ゆも今そぞのやうあつき。

10

10

○

切句

大本
代也城も後をもひにせんとんけりもむすはれつ、
是ハ後をもひにトヤクてひあせんトドリ きて

切句
切句も白井もさくらうがおほー 僕のありで
ある何ハあほく うみがとあてひとじまぶ様

切句

木き
ひくわくあらあバあゆうハアモリハあれひでひも既あ是あ等イ

けあゆストカタミノ里語ハナニ云フガアロソ

ともあらバあれノ里語ハワタナベヘヌ

いまとうひあれすのあお月ハひくらうふらうを
ああ六トカ サもあらバあれトツラミ

○ うきうひてめぐらうふらう

八十一

切句

木き
ちうみのやまのうち城も後をもひにせんとんけりもむすはれつ、
是川も

切句

木き
そがくやまのうち城も後をもひにせんと年のかをもひにそ

六帖

じや。ハあらきのや

切句

木き
ちゆうりそひがうらんぞハあらきのぞひのアモアリケル
上ハよがひてそひくらぞへスゼハハミア

下のぞハアモのぞするゆゑけりトモキビト

切句

木き
代士よアモアリ、アモアリシハ、うそうりそ 宮のアモアリ

切句

木き
アモアリヘくてもうもあくふいふあらかふす、あぞこそ
こぞハこれハ、つま之びこそ、上へぢも一そ
こぞうなまくふくあぞトふきく

石のうじてそひうるぞハ、ぞおおおもひ

俗語

後撰

女うら花すもくごみれあハなれあちの声みまうのぞ
いよたびてそし、うるそハうるそとく風とつても
ぞークレス いだぞ あふぞ なれぞトひくもも

あつ 又

古今十

初起のこりて小ぬゆる節おののく音子

ぞのうまほ桂葉もまくかんの葉の葉城よづ
あす音を川下せら是ハトクテ ゆる
じまくのは而へり、まく音を入る
トナ音也トありて是もうだしてそし、うるそ
むちじふかくもくな格あれをあうけす
一や二、三れどもト而りけなれぞトあうけす

八十二

ゆきあぬきとを序へれ秋のせあたがぬだけ一葉を落ぞ

かれぞトわざまハはまくとあはれぞ一葉を落ぞれを
後人可改

俗語

古今

ゆきあぬきとを序へれ秋のせあたがぬだけ一葉を落ぞ
り下さもあこをあはれぞとほはれたが被事一室の梅ぞ
ドモハ行ぞモトを入室を落ぞ モニハ是を

俗語

即物集

ゆきあぬきとを序へれ秋のせあたがぬだけ一葉を落ぞ
是をやあふぞトやラトアキモ

俗語

古今

最がれら神あうてたまの尾上のおひれあうやうれ

卷之三

卷之三

重々あふぞ

とくのよひ一時を経とくとてけあまシカレそのを

卷之二

卷之二

○アーティカリイ格の詞ハ

やう も今
かくのこぐれやうとまうきのひそははみけむまふつてけり
古今
をハ上へうりて 神のこぐれやうとまうく
もくともどくつきあくみぢりめりやうハ秋のあぐくふ秋を
是ハ秋のあぐくふ秋をスムハト上へうりてけり
そくハハニトモ

卷之三

後批
あまとあまハリトマチモリづれのまのまとつをキテ
モハレズトシヒムスミモトニトミテアツコトブセナリ
リノ里語ハドコニグニ
今本
あまも名ハシテ皆ふせめれどリハコトムクナリモアマ

後批

あわせ

西行八句
もへづト
づりノ里連
ゆ名ハシア

トヨニワ
トヨニワ
トヨニワ
トヨニワ
トヨニワ

、う

ハムの事

の
トヌア

卷之三

卷之二

91

是ハ「あく」の里、「ざ」上へうりて切る之
はくやへ味トシテ
詞書はふまで「く」ハ「あ」も切る格を下へてくら
例ありできるごとくせゆも「あ」切るべト有
○
ぞのや行
めどとむまび切てむまび「く」ハ「上」も「せ」る引句の
ぐくく。くす。つ。る。ぬ。ふ。む。ら。此立。云々。。ち。ら。く。
そのもまび詞を又ば序ふ一ツアリて又まれば引句をくねべ

そのやうめどもまび阿そもまびくは上もあざる引弓の
ごくく。くす。つるぬ。ふむら。此生。云々。き。ち。ら。

